

普段なら「じゃあ続きは明日で」しか言わないものだから、てっきりそういうところに関心がないのかと思っていたのだけれど。個人的には休みがなくても苦にはならないから、別段気にしてもいいなかった。

それにね、と彼女は続ける。

「わたしもしばらく出かけるから、うちの研究室はしばらく誰もいなくなるわよ」

「学会、って訳でもないですよね」

スケジュール通りであれば、来月まで学会や研究会もなかったはずだ。記憶を辿ってみるものの、それらしきイベントに心当たりはない。

「まあ私事都合だからね」

分かりました、と応じて、わたしは少しだけ考える。見透かしたかのように、彼女は言った。

「何日休むか考えてたでしょ」

「ええとその……はい。まとまった休みが初めてなもので」

「じゃ今日から一週間。旅行でもしてくれば？」

「あ、じゃあそれで……。えっと、申請は来週でも大丈夫ですか？」

「うん？ あ、そうか。休みなのに来てもらうのも悪いわね……じゃ、これもわたし

がやとくわ。どうせ自分の休講も手続きしなきゃいけないし」

「それじゃ、お言葉に甘えさせていただきます。そういえば、先生はどちらに？」

んー、と彼女は珍しく口籠る。聞いてはいけなかったかな、と少しだけ後悔して、わたしはフォローを入れようとした。が、先に言葉を発したのは彼女のほうで、

「宇佐見さ、学生のときオカルトサークルやったのよね？」

ええ、まあ。不良サークルでしたけど。

わたしはぼかしつつも、彼女の問いにこたえる。さすがに「結果を探し回ってました」などとは言えない。それにしても、とわたしは再度首を傾げる。彼女がここまでぼかした物言いをしたことがあっただろうか？ どこへ行くのか、という問いに話題を転換するなんて。

「そうか、そうね、じゃあ今日、研究室に来てくれる？」

は？ と間の抜けた疑問符を返す。今日から休めと言ってからまだ数分も経っていない。  
——おかしい。

「私用よ。だから断ってくれてもいいわ」

「いえ……、予定もありませんので。分かりました。では何時にお伺いすればいいで

「すか？」

わたしは彼女の応答に了解を返し、終話ボタンを押下した。

「……何？」

それが精一杯だった。端末を握ったまま、わたしはベッドに倒れ込む。

約束の時間まで、八時間と少し。

二度寝しよう、と思い立ったときには、わたしの意識は既にどこかへ飛んでいた。

§

久し振りに夢を見た。二度寝などという珍しいことをしたからなのか、それとも昨夜のノートのおかげなのか。ともかく、そこではわたしはまだ学生のままだった。

構内には学生が多かったから、午後の早い時間帯なのだと思う。そうして、わたしはそんな構内をふらふらと歩いていた。

呼び止められて振り向くと、そこには見慣れた笑顔が立っていて。わたしも同じように笑顔を浮かべて走り寄っていく。ああそうだ、新しく仕入れたネタがあったはずだったわ。思い出して、わたしは鞆の中を覗き込む。

もう、こんなところで始める気？ 彼女は呆れたように言って、人差し指をびんと

立てて見せた。そうねえ、おながが空いたわ。蓮子もそうだと思うんだけど。

わたしは肩を竦めて「今日は和食の気分ね」と返す。そんな会話で充分だった。

「ねえメリー」

歩きながらそう呼びかけて。彼女がこちらを向く。

その顔が、思い出せない。

§

むくり、と起き上がって時間を確かめる。待ち合わせまで二時間近く余裕があることに自分でも驚いた。

少しだけ残っている違和感は、明らかに部屋の景色が変わっているからだろう。

きれいな部屋。もう少し言ってしまうえば生活感がない部屋。

片付けた直後は常にそう感じる。いつまでこの状態が保てるだろう、と考え、下手したらずっとこのままかも知れない、とも思う。何しろこれまで通りの生活に戻るとしたら、またこの部屋は明かりを灯す機会を減らしてしまうのだから。